

東京都立国際高等学校 国際理解科目「社会生活」  
2022年6月1日(水) 大高 俊一郎 さんご講演

今日はハンセン病についての講演会をしていただいた。前回の授業からハンセン病についての事を学んでいたため予備知識はあったがやはりお話を聞けば聞くほど衝撃的なことばかりだった。私が最も驚いたのは、自分の子供の中絶手術を手伝わされた男性の話だ。その残酷さは言うまでもない。国の方針的にハンセン病患者の人権が無視されていたのは知っていたが、療養所にいた職員や医師、看護師の中にこの非人道的な行為を良しとしない人はいなかったのだろうか。このことから、政府だけでなく国民全体の中でハンセン病患者がいかにひどく見られていたのかがわかる。これらの事はハンセン病患者だけでなくその家族の人生を壊した。現代でも新型コロナウイルスが世界中で感染拡大している。時代は違えど状況は同じである。感染してしまった人にも、その家族にも罪はないので差別的な態度を向ける事を許さず温かく接してあげたい。国や政府もハンセン病の時の失態を繰り返さないように人道的な対策をとってほしい。講演会中のお話にあった2つの小学校の話も印象的だった。もし自分の子供の小学校にハンセン病患者の子供が転校すると言われ、その子たちから病気をもらう可能性があるかと勘違いしていたら私も同じ事をしたかもしれない。しかし、それは自分の子を守る当然の親心だ。大事なものは、真偽を自分で見極めることだ。親がハンセン病だからといって子供からもらう可能性はないという真実を知っていなければならなかったのだ。私はこれを機に、人々が言い回してる事を真実として鵜呑みにするのではなく、自分で考えて判断したい。

前回の授業でなんとなくハンセン病についてはわかったつもりでいたけれど、今回話を聞いて、差別が起きてしまった経緯やどのような差別をうけていたかがより詳細にわかりました。中でも一番印象に残っているのは小学校においてのハンセン病患者の子供の受け入れについての話です。私は最初に自分ならどうするかという問いを出された時、「受け入れないなんてありえない。遺伝する病気でもないのに。」と思いました。しかしその後の、「差別とは自分のことになった時に姿を表す」という言葉を聞き、はっとしました。正直この言葉を聞いた今もなお、私なら受け入れるだろうと思っているけれど、実際にその場になってみたら分からないかもしれないと考えました。また、今の環境だからそう思えるけど、当時の多くの人々がハンセン病患者を差別していた状況でも同じ考えでいて、意見を主張できるのだろうかなども考えました。社会生活の最初の授業でもやったように、差別とは無意識のことが多く、口だけではなんとでも良いように言えるけれど実際に自分の中の差別が現れるのは自分が当事者や関係者となった時にどう思うか、そしてどのような行動をするかです。それを改めて今回の授業で学ぶことが出来ました。自分の中の本当の差別を無くすためにも、ハンセン病は感染しにくい病気で遺伝しないことや、今までにハンセン病にかかった人はひどい差別を受けたことなど、もっとハンセン病について詳しくなりたいたいと思いました。ハンセン病を題材とした映画なども見てみようと思います。今回は貴重な講演をしていただきありがとうございました。

今まで私はこの日本に恐怖を与えた感染症や病気などをいくつか聞いたことがあった。イタイイタイ病や風疹、ペストなど今流行っている新型コロナウイルスもそうだ。だが、今回の授業で習ったハンセン病という病気はほんと数回しか聞いたことがなく、一体どのような病気でどんな被害が広まったのかわからなかった。授業では、ハンセン病という病気の原因となるらい菌や患者となった人々の生活などたくさん学んだ。最も印象的だったのは、ハンセン病患者の療養所である。療養所という名でありながらどこか収容所のような印象を与える設備、そして過酷な生活をみてショックが大きかった。授業を受ける前に自分でハンセン病について調べ、あるニュースをみた。それは今現在、元気に暮らしている元ハンセン病患者だった人の療養所での生活が語られているニュースだった。彼が語るには、患者の面倒は患者がみて、自分たちで必要な道具は自分たちで作出し、患者であり治療を受けなければならないはずの人々が労働などをしていたと話す。また、感染したことが周りに知れ渡れば距離を置かれ、差別をされてしまう社会の雰囲気も語っていた。人生で初めてハンセン病について学んだからこそ、このショックはとても大きく当時の社会に苛立ちを覚えた。それでも完治した患者たちは、社会復帰をし、いまでも懸命に生きてこのような社会の冷たい目にも負けずに頑張っている。私は彼らに敬意を表す。感染したことは誰のせいでもなく、感染したからと言って罪人のように、悪者のように扱われた彼らが当時の辛い現実を何も知らない後世へと伝えていくことがなによりも財産であると思った。

今回はハンセン病資料館の方の講演を聞き、療養所の実情や実名を挙げて国とたたかった方々の物語を聴くことができた。前回の授業ではビデオを通じてハンセン病や罹患者に施された政策の概要を学び、今回はより内情に迫った事実に着目することができた。お話の中で、最も印象に残ったものが二つある。一つ目は、療養施設内での結婚についてだ。患者全員が、結婚自体は認められている。しかし、仮に妊娠してしまった場合、中絶をしなければならず、その上その胎児はホルマリン漬けにされて保管されるというものだ。私は、「ホルマリン漬け」というある種残酷とも捉えられる手段に不自然さを感じた。調べたところ、胎児の標本を残したのは医学的な要因が大きいと分かった。当時の日本では安全な中絶法を誰でもどこでも受けられる環境がなかったため、中絶により生まれた胎児は無傷であることがほとんどなかった。そのため、療養所で公的な手術により生まれた無傷の胎児の存在が、研究対象として非常に貴重であったということだ。そのことに関しての違和感を調べて理由を明確にすることで新たな学びになった。二つ目は、「差別は自分のことになって初めて姿を現す」という言葉だ。これまで社会生活で様々な差別の事例や変遷を学んできた。その都度、「ああ、こんな理由による差別はあってはならない。」「私ならそんな行動はとらない。」と感じていた。では、実際自分の隣人がその時の社会の標的であったら、自分は社会の風潮に流されずに正常な判断ができるだろうか、と考えたときに、怖気づいて結局は周りに合わせてしまう自分を疑わずにはいられなかった。身近なところで差別が起きているとしたら、まずは自分から周囲に正義を示し、周りの姿勢を変えるほどの行動を起こしていくことが大切だろう。

今回の社会生活の授業をするまで、ハンセン病についての知識は全くありませんでした。中学で先生が話をすることも、教科書で「ハンセン病」という文字以外の情報を得ることも無かったと思います。なので今回のお話を聞いて、こんなに惨い問題が日本の人々に広がっていないことがおかしいと思いました。最初に隔離や差別の事を知った時、差別の理由や背景は違うけれど、ユダヤ人迫害そしてアウシュビッツでの出来事を連想しました。他の問題と比べたり並べたりすることは正しくはないと思いますが、同じように人間が人間として扱われない状況があったのに関わらず、ここまで認知度に差があることは大きな問題だと思います。以前の社会生活の授業で取り上げた在日コリアンの人々の問題やこのハンセン病の問題など、日本の教育課程で他国の歴史上の悲惨な出来事や許されざる行動は比較的取り上げるのに対して、日本が犯した過ちについて詳しく学ぶことは少ないと思いました。同じ過ちを繰り返さないために教育の形が変わって欲しいです。また、自分達が当時の状況を実際に経験したわけじゃないし歴史の教科書に載っているから、昔のことだと思ってしまふけれど今この瞬間もまだ続いている問題であることを忘れてはいけないと思いました。私は今まで、差別や偏見などの問題について考えた時に「正しい知識をつけること」を解決策として挙げていました。ですが、今回のお話を聞いてそれだけでは不十分だということがよく分かりました。知識と共に他の人の立場になって考えることが必要だと思います。どんな問題においても、相手の気持ちを考えること、そして自分が当事者であったらどう思うのか、どうして欲しいか、どうして欲しくないのか、それを正しい知識を持って行えば差別が生まれることを妨げることが出来るのではないかと思います。自分じゃないからどうでもいい、ではなく自分のことのように考えることをどんな問題に対してもしていきたいです。世界にコロナウイルスが広がり、それに伴いアジア系の人に対するヘイトクライムも広がっています。過去の過ちをもう一度繰り返している今、世界という大きな規模でも、ハンセン病の問題から学べることは沢山あると思いました。

先日はハンセン病について私たちに教えてくださいありがとうございました。ハンセン病については、中学校の社会の授業で軽く習ったのみだったので、今回詳しく聞くことができてとても興味深かったです。ハンセン病患者に対し国が行ってきた対応については、とても悲しい思いになりました。歴史での文明開化の時代は、新しいものや技術がたくさん入ってきて、輝かしい時代のように感じていたけど、その裏ではこんなにも苦しめられていた人々がいたことに衝撃を受けました。文明開化以降の国の対応は、ハンセン病への偏見、差別を促進させ、ハンセン病の危険性の低さが判明してもより一層差別を広げるような対応をとっていたというお話には耳を疑いました。激しい差別により患者の家族までが迫害され、心のよりどころとなるはずの家族との間にも溝ができてしまうことは本当に悲しいことだと思いました。また、患者であるはずの方々を働かせる刑務所のような療養所には、憤りを感じました。

黒髪小学校事件はとても難しい問題だと思いました。小学校の保護者たちは政府から影響を受け、自分の子供を守ろうとし、竜田寮の人は、子供たちを普通の学校に通わせてあげたかったのだと考えられます。これはつい最近までコロナについても差別があったので、現代にも起こり得る話だなど感じました。そして現代では、SNSを通して誤った情報が拡散されやすくなっています。インターネットの情報が正しいかどうかを見極めるのは非常に難しく、コロナが始まったころには薬局からマスクがすべて消えました。ハンセン病の事例では国が発表した情報を鵜呑みにした国民による差別でしたが、最近のコロナ情勢のように今後も国やインターネットの情報から差別が起こることが考えられます。国や情報を発信する立場の人は、間違っただけを発信しないような慎重な行動が求められます。また、それらの情報を鵜呑みにせず、私たちひとりひとりが当事者のことを思って行動することが大切です。

今回、国立ハンセン病資料館の方のお話を聞いて、差別の恐ろしさと倫理について考えさせられました。国のプロパガンダで偏見や差別は拡大したことや、市民は無らい県運動に積極的で、ある地域ではトラックで強制連行されたこと。これらにより、一家離散や失業、ましてや自殺や一家心中をするものまでいた、というのは大変恐ろしいことであり、病気ではなく差別によって心や命が傷つけられるというのは普通に考えておかしいことだと強く感じました。国は病人が増加傾向にあることを恥じ、強制隔離という方法へ踏み切ったわけですが、このような差別や道徳心のない行動でたくさんの人を悲しませるほうが何十倍も恥ずかしいことだと思います。また、今もお影響は続いていて、家族がいなかったり、高齢や体が不自由、差別をまだ恐れているなどの理由から、療養所暮らしをされていることを考えると胸が痛くなりました。ましてや、一度入ったら出られないといわれていたように、多くの方は家族と同じ墓に入ることができない。遺骨となっても差別の対象であることは変わりなく、死んでも出られないという現状に驚きを隠せませんでした。この残酷な事実は私をもものすごく驚かせましたが、今までの考えを少し覆すような新たな発見もありました。それは、病気になった人の全員がらい予防法に反対していたわけではないということです。中には療養所から追い出されるのではないかと考える人もいたと聞き、もし療養所で労働や人道的におかしい対応をされていなかったとしたら、患者の人たちにおける本当の意味での療養所になったのではないかと感じました。コロナによる誹謗中傷や差別、同じではありませんが似たような状況下の今、患者の人への応援と医療従事者へのリスペクト、ただ少しの気遣いだけでいいのだ、ということを経験してから私は感じました。確かに、先の見えない恐怖や治療法が確立していないことから生まれる不安やマイナスな思考はしょうがないと思いますが、それを理由に避けてばかりでは同じ過ちを繰り返すだけだと思います。コロナになった人もなっていない人もみんな、どうやってこのウイルスと共存していくのかを考えるのが、いま私たちのすべきことである、と全体を通して思いました。とても貴重なお話が聞けて、自分を見つめなおす良いきっかけとなりました。ありがとうございました。

今日はハンセン病についての講演会に参加した。大高さんの話の中で心に残った言葉があった。それは「正しい知識だけでは偏見・差別は止められない」だ。私は今までの社会生活でのレポートなどでも、正しい知識さえあれば偏見・差別はなくなるという旨を述べてきた。コロナ禍が生み出した、医療従事者とその家族やエッセンシャルワーカーに対する偏見・差別が起きる理由は単なる人々の知識不足ではないことを学んだ。私は世間を見くびっていたようだ。当時は新型コロナに関する報道を目にしない日はなく、人々は感染方法や対策方法についてもすっかり正しい知識も持ち合わせていた。全ての人に正しい知識はあったのだ。だが、大高さんの「科学が感情に負けた」という言葉にあったように、正しい知識があったとしても、自分のため、家族のため、友人のためを思ってしまうと、自分の感情を優先し、他人に対して平気で自分で作り出した正義を振り翳してしまうものだ。人間の性とも言えるが、これがエスカレートし、偏見・差別となり、自分が想像するよりも遥かに多い人々を傷つけてしまうこととなるのだ。これは講演会で述べられた「無癩県運動」に該当すると思う。ハンセン病に対する偏見・差別が広がった要因は国の間違っただけだが、このような人々の心理も働いていたことも確かだ。大高さんもおっしゃっていたように、このような人の感情から引き起こされる偏見・差別をなくしていくためには、正しい知識に伴った行動が必要不可欠だと思った。適切な行動をすることは非常に困難であり、大人になればできるようになるものではない。時間や経験が人に適切な行動をさせるわけではないということは、逆説的には、中学生や高校生でも正しい知識に基づいて適切な行動をとることは十分に可能だと言える。かえって経験の少ない若者の方が柔軟に対応できるのではないかと思う。い

つしか偏見・差別で悲しい思いをする人がいなくなる社会を目指してみんなで適切な行動に取り組んでいきたい。

今回は二度目のハンセン病授業を通して、感染症がもたらす差別について、国立ハンセン病資料館の方に学校に来ていただき話をしてもらいました。はじめに、ハンセン病がどのような病気であるのか、説明していただきました。ハンセン病は日本では元々らい病と呼ばれていて、感染源は癩菌(らい菌)という細菌によって引き起こされる病気で、感染力はとても弱く大人から大人への感染は稀で、主に大人から免疫機能が弱い小児が感染するような形です。この菌の特徴として感染してから発症するまでに潜伏期間が三年から五年、数十年間潜伏することもあります。発症すると末梢神経に損傷を与えて麻痺や感覚が無くなったり、視覚を失ったりします。病気自体が治っても、皮膚の変形などの後遺症が差別対象にされる理由となっていました。1907年「癩予防二関スル件」が日本で初めて制定され放浪しているハンセン病患者の受け入れ先として療養所が設置されました。1931年戦時体制に向かう中で「らい予防法」が制定されました、この法律によりハンセン病患者を強制的に療養所に収監できるようになりました。それに加え「無癩県運動」によって市民が地元にいるハンセン病患者を療養所に引き渡していました。そもそも療養所は病気にかかった患者を治るまで世話をして治療を行うのが本来の目的ですが、このハンセン病患者用の療養所は監獄のようでした。一度療養所に入ると二度と出られず、亡くなったあとは療養所の納骨堂に埋葬されました。療養所では患者達は酷い扱いを受けていました。患者達は療養所の院長の決めた規則には絶対従わないといけなく、従わない場合は重監房に収監され、その多くの方は餓死や凍死で亡くなりました。その他に患者であるにも関わらず軽症者は重症者の世話をしなくてはならなかったり、患者同士の結婚は許されていても子供は作れず、子供を作れないように男性は断種手術をされ、女性が妊娠すれば人工中絶を強制されました。1941年にアメリカ合衆国でプロミンというハンセン病に有効だという薬が開発されてから、世界中に少しずつ広まってきましたが、それにも関わらず患者の強制隔離は続きました。隔離政策が終わったのは1996年「らい予防法」が廃止されてからでしたが、すでに療養所にいた人は社会には復帰できない年齢になっており、社会に出ても差別や偏見が残っていることを恐れ療養所に残った人が多いそうです。今「らい予防法」が廃止されたあとも偏見や差別は残っていて、これは皆んなに情報が十分行き渡っていないからです。そのために正しい情報を知って、これからもハンセン病の歴史を教訓にして同じ誤ちを起こさないようにしたいと思いました。

今回の授業では、ハンセン病で犯された過ちと教訓を学びました。私が衝撃を受けたのは、真理子さんのエピソードです。今頃は70代に歳をとって幸せに生きていたはずの彼女が、軽率で無意味な差別によって中絶され、ホルマリン漬けにされたと聞き、とても悲しくなりました。このほかに、監禁室で平然と人権を侵害した殺人が行われたことや、家族との縁を切られ、あるいは差別への恐れから、今でも療養所から出られないという話も聞きました。このことから、当時の日本の、感染者には死んでもらう絶対隔離の方針が如何に残酷であったかを痛感しました。大きな力の誤った使い方や、社会の無知蒙昧が現在までにわたって患者に人生被害をもたらしたことに對し、これから国政を担う私たちの選択の重要性と責任を自覚しました。加えて、未知の恐怖に直面した時に同じ過ちを繰り返さないための教訓にもなりました。また、今回の授業では、教訓を生かすことの難しさも学びました。なぜなら、不安や恐怖は自分のこととなると差別になることや、科学が感情に負けることを教わったからです。勉強して正しい知識を身につけても、危険性が現実味を帯びると、冷静な考えを失い、誰かを敵に仕立て上げて排除しようとしてしまうと知りました。正しい行動をとるためには、敵にされる人たちの境遇や悲しみを想像することではじめて実現すると考えます。そのため、これからは勉強するだけでなく、社会生活の講話などを通して被害に遭われた方や苦しんだ方のメッセージを受け止め、過ちを繰り返さないためにはどうすればいいか自分なりに考えようと思います。

今回の授業ではハンセン病についてのお話を聞きました。ハンセン病については中学生の時に少し授業で触れた程度だったので、今回ハンセン病について深く知れて貴重な機会でした。まず、今回ハンセン病について知って最も驚いたことは、らい予防法が廃止されたことや、らい予防法を違憲訴訟として訴えたのはわりと最近の出来事だということです。日本は国民の自由が認められているので、人を何十

年も強制収容していたというのはかなり意外でした。現在と比べて医療技術が進歩していなかった当時、確かにハンセン病は本当に恐ろしい病気だったと思います。感染した人がいると聞くとどうしてもその人のことを一時的に避けてしまうと思います。コロナ禍を経験している私たちはより理解できます。まだハンセン病にかかっていない国民を守るために、病気が治るまでの短期間の隔離は必要だったと思いますが、ハンセン病患者に対しての偏見や差別があまりにも酷いと思います。ハンセン病は大して危険ではないことが分かったり、薬が開発されたりした後でもハンセン病患者の隔離は続いたというのは信じられません。もし、私が当時のハンセン病患者だったら、収容所からは出してもらえない、家族にまで被害が及ぶ、世間の人々からは偏見・差別されるなどの人生はとても耐えられません。自分はなぜ生きているのか、自分の人権とは何なのかと何度も問うと思います。今更国から謝罪されても許せません。療養所から出してもらっても、何十年も社会から隔離されていたせいで上手く現在の社会に適合できなったり、世間からの目線を気にしたりしてしまって満足な生活ができるとは思えません。実際、このようなことに苦しんでいる人がたくさんいると聞いて、とても気が重いです。このような人々を助けるために、今回学んだ知識を周りの人に共有しようと思います。私が今回の授業で教わるまでほとんど知識がなかったのと同じように、周囲の人々もちゃんとした知識を持っている人は多くないと思います。まずは私がちゃんとしたハンセン病についての知識を持ててよかったです。とても貴重な機会でした。

とても興味深い講演会を開いて下さりありがとうございます。初めて聞いたことも多く、自分にとってプラスの知識が沢山増えました。私が講演を聞いて印象に残ったことが2つあります。1つ目は、ハンセン病患者に対する法律の撤廃がつい最近のこと。2つ目は、療養所で自らの子供を亡くしてしまったお父さんのことです。法律撤廃について話してくださった際、平成という言葉が出てきたことによりかなり衝撃を覚えました。それまでの間何十回起訴されたのか、被害者はもちろん、その家族も無念のままに亡くなってしまった人が沢山いたのであろうことに、腹立たしい気持ちになりました。今私たち社会生活を選択している生徒たちは、差別や、偏見、またそれによる被害を受けた方々のお話を聞いて、知識を増やしているところです。その時毎回思うことは、なんでこんなにも大切なことをもっと早く、例えば学校などで教えてくれないのだろうという半分怒りのような疑問を持ちます。原爆や被災については劇的に教科書に載せるわりには、在日外国人問題やLGBTQ、お話しして下さったようなハンセン病など、知っているようで何も知らないことばかりです。その多くは日本人が原因のことばかりなので言いつらいのは分かります。でもだからといってそのままあなにしてよい問題ではないことだけは確かです。今回の講演会でその気持ちをまた強くしました。自らの子供を父である自分の手で取り出し、自分の腕の中で亡くすという、言葉にすることの出来ないような出来事をもう二度と繰り返さないためにも、情報に対して受け身であることをやめたいです。受け流すだけでは足りないから。もちろん偏った情報には気をつけます。その上で自分の知識を増やしてしっかり考えていきたいと思っています。今回は本当にありがとうございました

今までハンセン病についてあまり知らなかったが、今回の授業で莫大な影響力をもつ国が無知な差別的な法律を出したことで国民に根強い差別を植え付けたことを知った。今でも、影響力がある人、インフルエンサーなどが発言すると無意識でもそれが正しいのだとってしまうことが多いと思う。国家が嘘を撒き散らして沢山の人生を奪った取り返しのつかない過ちを私達は忘れてはいけないと強く思った。辛い内容もあったけれど学ぶことができてよかった。また、小中学校でももっと詳しく学ぶべきだと思った。特に印象に残ったのは中絶手術をした赤ちゃんが亡くなる話である。赤ちゃんは、もちろんお母さんもお父さんも何も悪くないのに、残酷な現実を突きつけられその気持ちを想像すると涙がでた。好きで病気になったわけではないのに、刑務所のような生活を強いられ社会から断絶しここで一生暮らせと言われたら、私はそれでも前を向いて生きられるのだろうかと考えたが、たぶんできなかったと思う。生きる意味を見失ってしまうと思う。感染症についても、それだけ聞くとつい怖いイメージがあるが、本当に正しい知識を皆が知って、冷静に対処することが大切だと思った。なんとなく、イメージで、あの人が言ってたから、など根拠のないことを鵜呑みにすると恐ろしいことが起こってしまう。今回大切なことを学びました。

ハンセン病についての貴重なお話を聞くことができ、とても勉強になりました。ありがとうございました。

今回のお話を聞いて、以前見た動画だけではわからないほど過酷な環境でハンセン病が扱われていたことや、自分の想像を超えるくらいひどい差別があったということにとっても驚きました。それと共に、現在はハンセン病は完治する病気であるという事実があるにもかかわらず、今もなおハンセン病に対する強い差別が根付いていることに日本での差別の課題を感じましたし、これから少しでもこの差別をなくしていくためにもっと多くの人がこの事実を知るべきだと思いました。療養所では、患者が他の患者の看病を行ったり、何人もの人たちが一つの部屋での生活をしなくてはならず、プライバシーがないという不合理な状態から、刑務所に近い生活だったという話がありました。ハンセン病患者だからといったひどい扱い・差別が、職場・近所でのコミュニティ・学校のみならず、療養所でまで行われていたことを考えると、当時の感染者たちの居場所はどこにもなかったと思います。日本で以前行われていた農耕牧畜などによる、みんなで協力して一丸となるべきという考えから生まれた「協調性」は日本の良さである一方、周りに迷惑をかけないように、他と異なるものは排除していくという差別に繋がる考え方にも関係するのではないかと思います。ジェンダーによる差別の問題への取り組みが日本では遅れているといわれることが多いですが、今ではこの問題を知らない人はだんだん減ってきていると思います。社会全体の大きな変化はまだあまり見られないけれど、知っている人がいるからこそこれからさらに取り上げられていく問題だと思っています。同様に、ハンセン病の差別もまずは知ることが大切だし、今回の授業を通して私が初めて知ることもたくさんあったので、少しずつ自分の言葉で発信していきたいです。本当にありがとうございました。

今回、ハンセン病患者に対する差別についてお話を聞くことができとても良かったです。ハンセン病患者への差別が長い間行われていたこと、それによって患者自身だけではなくその家族までも差別を受けてしまったことなど、想像を絶する差別が行われていたことを知れました。中でも印象に残ったのは、ハンセン病患者の子どもの話です。ハンセン病患者の子供が小学校に入学する際にその学校の保護者が大反対したということが非常に印象に残りました。ハンセン病に対する間違った認識が存在したままで、自分の子供が通う小学校に患者の子供たちが入学すると聞いたら不安になる気持ちもわかりますが、部外者である私たちから見ればその抗議活動が間違ったものだと分かります。しかし、ひとたびそれが自分ごとになれば冷静な判断をすることはとても難しいものだと思います。だからこそ、このことを教訓に同じことが起こらないようにするべきだと思いました。謂れのない差別を受けている人がいて、それがもし自分の近くにいたとしたら手を差し伸べる。それはとても難しいことですが、手を差し伸べることができる人間になりたいと思いました。また、療養所内で妊娠した患者さんの中絶に関するお話を聞いて、とても衝撃を受けました。療養所内で妊娠をしたら中絶をしなければならないという決まりがあることがそもそも信じられないし、自分で自分の子供を中絶した体験を聞いて、これはあってはならないことだと強く感じました。今回お話を聞くことができとても良かったです。

ハンセン病患者が酷い差別を受けながら生きてきたことは前回知り、その上で今回の国立ハンセン病資料館の方の話を聞きました。そこで感じたのは正しい知識を持っていたとしても、感情には叶わないということでした。プロミンという薬が開発されてからハンセン病は治る病気と言われるようになったものの、龍田寮事件は起こりました。両親がハンセン病患者なだけで、子供は元気な普通の子供なのに周りの人から非難され、普通の小学校にさえ通うことができなかつた挙句、近隣の小学校が黒髪小に対して受け入れてあげてくれることを提案したが、いざ自分の学校に受け入れるとなると気が引けたのか拒否したそうです。この話を聞いて、人間は他人のことは人ごとでしか考えてないのだと思いました。そして、中山節夫監督がおっしゃる、「差別は自分のことになったときに姿をあらわす」という言葉がとても腑に落ちた気がしました。また、正しい知識が感情に負けてしまうとはこういうことなのだと思います。だから、正しい知識があるうえで自分が当事者になった時のことを考えて行動することが差別を減らすために必要なことだということに納得できました。「もし自分が〜されたらどんな気持ちになるかな。自分がやられて嫌なことを友達や他の人にしてもいいと思う？」これは私が小さい時に親から言われた言葉です。自分がされて嫌なことは他人にもしない。感情に負けてしまいそうなときは、この単純な言葉を思い出してほしいなと思いました。

今回の授業では、実際にハンセン病についてより詳しく話を聞くことで、多くのことを知り、考えることができた。まず、ハンセン病に対して、「おそろしい伝染病」と決めつけてしまい、政府が絶対隔離したことによってハンセン病の差別や偏見を助長してしまったこと。これは多くの人が正しい知識を持てずに間違っていることを正しいことだと思い込んでしまったことから始まり、政府もその考えによって隔離をしたことで

さらに誤解が進んでしまったことが原因だとわかり、例え他のことの話でも、ちょっとした間違った偏見やイメージを持っているだけでも、それが大勢になれば本当のことでなくても本当のことのように扱われてしまうんだと気づき、怖いと感じた。次に驚いたことが、療養所で亡くなった方はその納骨堂に入り、家族とは同じお墓には入れず今も差別が続いていたり、それに対して家族の方々が隠しながら生活しなければならない環境があるということだ。今回の授業で私は初めてハンセン病について知り、周りでもあまりそのような病気に対する差別についてのことを聞いたことがなかったため、ハンセン病は今治る病気なのにどうして差別をする人がいるのか疑問に思った。まだ偏見や間違ったイメージによって差別が続いているのならば、簡単にはいかないかもしれないが、それは間違っていると広めていくことが必要だと思った。最後に、授業でも仰られていたように、なぜ人権は大切で、なぜ差別はダメなのかと考えたときに、差別は「人生の可能性を奪い、その人の人生を歪めてしまう」という考えを聞いて、本当にその通りだなと思った。実際にはそうではなくても偏見だけによって差別を受け、それまでのような暮らしができなくなってしまったり、その人の可能性を奪ってしまうというのは本当にあってはならないことだと思う。「正しい知識を身につけた上で当事者になった時にどういう行動ができるか」ということについては今生活している全員が考える必要があると思うし、それによって差別や偏見が少しでも世の中から減って、より多くの人が生きたいように生きられる世界になって欲しいと思った。

私は、ハンセン病についてのお話を聞き、改めてハンセン病という病気の恐ろしさと、差別や偏見はあってはならないということを感じました。そして、それとともに、差別や偏見をなくすために、自分が行動すべきことについて考えることができました。まず、私がお話を聞いて感じたのは、ハンセン病の恐ろしさは、病気の症状への怖さではなく、政府による強制隔離や、差別や偏見であるということです。ハンセン病にかかってしまった人は療養所に送られ、その人の家族も周りの人から差別されるという状況が、当たり前のようにあったということに、とても驚きました。中でも私が最も衝撃的に感じたのは、療養所が決して病院のように患者の方たちを看病するのではなく、刑務所のような劣悪な環境で、療養所が「死んでもらうための場所」として扱われていたことです。日本からハンセン病をなくすために、患者の方たちを隔離し、全員に死んでもらうという政府の考え方に、疑問を抱きました。このような、病気による差別や偏見は、今流行している新型コロナウイルスについてもいえると思います。実際に、新型コロナウイルスに感染したことを理由に会社を解雇させられるといった事例も過去にあったという話を聞いたことがあります。過去にハンセン病患者への差別や偏見で多くの人がつらい思いをしたのに、また現代で同じことが問題になっています。だから私は、過去の過ちをたくさんの人に伝えていくことがとても大切だと思いました。過去の過ちから得られたことを、ほかの人に伝えていくことで、誰かの過ちを減らし、よりよい社会を形成することができると思いました。

大変貴重なお話をしていただき、本当にありがとうございました。

ハンセン病の話をしてくださりありがとうございました。今まで私の中で、「ハンセン病」は昔どこかで流行した病気という知識しかなく、もしハンセン病にかかった人に出会うことがあっても「かわいそうだな」といった浅はかな感想しか抱けなかったと思います。今回の話でとても印象に残ったのは日本が国を揚げてハンセン病を排除しようとしたプロパガンダの時代です。知識不足ではあったものの、「ハンセン病は悪い病気だ。治らない病気だ。」と考え人を人と見ないような政策を取ったことに、自国として残念に思いました。らい予防法により家族や子供と引き離されたり人権そのものを失ったりした人がいた中で、なぜこのことをやめようとしなかったのか、私は考えてみました。様々な要因があったとは思いますが、戦争の時代と重なり人々が誰かを悪者にしなければやっていけないような時代だったのではないかと私は思います。また、戦後化学療法が確立したあとも差別は続いたと伺いました。このことは一度不信感や嫌悪感を感じて差別してしまった対象はしっかり見直されないのだと、残酷な事実を物語っていると思います。また、もう一つ鮮明に記憶に残っているお話は「黒髪小学校事件」です。子供たちを巡って、多数の大人が子供を傷つけるような愚かなことを絶対にはいけないと思いました。この事件を題材にした映画の監督である、中山監督の仰った言葉が紹介されていましたが、その言葉が深く心に刺さりました。「差別は自分のこととなったとき姿を表す」これはいずれ大人になる私達誰もが覚えておかなければならない言葉だと思います。私がもしハンセン病の方とお会いする機会があれば、差別のない世界を作るにはどうすればよいのか、自分なりの意見も伝え、元患者の方の意見も伺ってみたいです。貴重な歴史のお話をありがとうございました。

今回私はハンセン病についての講演会を聞いて、ハンセン病問題の差別は深刻な人権問題であり、新型コロナウイルスとも病気を理由とした差別という点で共通していることから、今の社会において感染症を理由と

する差別について知ってもらう必要があると考えました。ハンセン病患者は新型コロナウイルス患者よりもひどく差別され、刑務所のような療養所で様々な規制の中過ごし、生まれた赤ちゃんの命をも奪われてしまうという話で、なぜそんなにも差別をされる必要があるのか、当時の政府はなぜ間違っただけで多くの国民を傷つけることをしてしまったのか、社会に問いかける必要があると感じました。そうすることで、また病気を理由とした差別という同じ過ちを犯さないようにすることができると考えたからです。新型コロナウイルスが流行し始めた頃、感染した患者さんに対する差別がひどくありました。感染したからといって仕事を辞めさせられたり、学校で仲間はずれにされたり、誹謗中傷があったりしました。それを見て私は、「感染したくて感染したわけでもないのに差別するのはおかしい」と思いました。ハンセン病についても同じようなことが言えると思います。ハンセン病に関しては、新型コロナウイルスほど感染力が強いわけではなく、感染してしまうことで、自分だけでなく家族も差別を受け、生涯差別され続けただけでなく、ハンセン病患者に至っては亡くなっても差別され続けたという事実があったことを知り、新型コロナウイルスではハンセン病のときほどひどい差別を受けているわけではないが、将来ハンセン病問題について知らない人達がまた同じような人権問題を引き起こしてしまうのではないかと思います。このことから、私は今の社会に生きる人達に向けて、感染症を理由とした差別について知ってもらう必要があると考えました。

今回ハンセン病についてのお話を伺って、どのような経緯でハンセン病患者が差別されるようになったのかを知ることができ、今のコロナ禍のように人々が感じる不安感というものが差別や偏見を生んだ要因の一つなのだと改めて気付かされました。一番印象に残ったのは黒髪小学校事件(龍田寮事件)についてで、本人はかかっていなくても親がかかっているからという理由で学校に通うのを断られたのは、正直子供は悪くないのになんでそんなに懸念するのだろうと思いました。ですが、自分達だったらどうしますかと問われ友達と話し合ってみると、もしこの時代に生きていたとして、不安や恐怖にかられている自分がそのような判断をしないのかと言われたら自分も懸念や嫌悪の気持ちを持ってしまふかもしれないと思いました。その中でもう1つ話が出たのは、今の時代は多くの技術が発達して科学的に多くの事を証明したり根拠とすることができるが、ハンセン病が流行した時代はこのような証明が難しかった為、不安感が払拭されず偏見や差別がなくならなかったのではないかと意見です。それにより本当なのかと疑心暗鬼になってより酷くなることにも繋がってしまったのではないかと考えました。これ以外にも、国家が優生思想を広めたことも大きな要因なのだと知りました。国がこのように思想を広めたことで、人々同士で密告や裏切りが起きていたのは本当に辛く苦しいことだなとしか感情が湧きません。薬治療が可能となっても国はらい予防法をやめなかったことで、入所者の方は治っているにもかかわらず何も出来なかったことはその人たちの人生を奪っているのではないかと思います。ハンセン病という感染症が今の私たちに伝えてくれているのは正しい知識を元に行動すること(誤った情報やひとつの情報だけで判断しない)はもちろんですが、国家権力のあり方についても考えさせられると感じました。差別や偏見は人の人生を大きく狂わせ、その人の未来すら潰してしまうことがあるというのを絶対に知っておかなければいけないし、2度と同じ過ちを繰り返してはいけないのだと強く思います。今回このような講演をして下さりありがとうございました。自分にとって貴重な経験をすることができ、有意義な時間を過ごせました。ハンセン病の歴史を知ることが出来たので、資料館に行き実際の生活の様子展示を見たいと思いました。

私は、もしかしたら新型コロナウイルスも時代を間違えていたらハンセン病のような扱いをされていたのかもしれないと思いました。コロナウイルスに感染した人が差別を受けているケースが沢山あります。ハンセン病も、感染した人や家族は周囲の人から差別を受けてしまいます。コロナウイルスに感染した場合や濃厚接触者となった場合、体からウイルスが消えるまで外に出れなかったり、家族と離されてホテルで過ごしたりもします。ハンセン病は感染力は強くなかったものの、患者を隠すために隔離されてしまいます。もしコロナウイルスがこのハンセン病の時期に流行ったら、今ほど医療も進んでいないため治療やワクチン接種ができず感染者を徹底的に隔離してしまうという方法がとられていたのかなと思いました。今ヨーロッパではサル痘の感染が広がり始めています。コロナウイルスは体内での症状のみなので正直黙っていれば感染していることも感染していたということも周囲の人にはわかりません。しかし、サル痘は体に発疹ができてしまいます。ハンセン病も体に斑紋ができたり、重症化すると身体が変形してしまう症状を持っています。他人が見て一目でわかってしまうという意味ではコロナウイルスよりもサル痘の方がハンセン病に近いものを持っていると思います。見た目に出るということはより差別を受けやすいのではないのでしょうか。サル痘に感染しないために私たち自身が感染予防を徹底するにはもちろんですが、万が一感染してしまっても差別が起きない世の中になって欲しいです。

今回、国立ハンセン病資料館の方が講演されている途中、「あなたは親がハンセン病の子供に対してどのように接するか?」、「人権はなぜ大切で、差別はなぜだめなのか?」、ということについて隣の人と話し合いをしました。私は、今だったらその子を受け入れて何の偏見もなく接することが出来ると思います。ハンセン病は、感染しにくく、治る病だと知っているし、その子供も親も何も悪いことをしていないと分かっているからです。しかし、もし差別が酷かった時代にいたら、国から流される情報や、周りの大人の意見から、今とは違うことを思っていたのではないかと思います。「正しい知識を持っているだけでは、不十分」、私はこの言葉の印象が強く残りました。私が、虫は私に何も害を加えないと分かっているけど、どうしても気持ち悪い、となってしまうことと同じことだと思いました。正しい知識を持った上で、今までの態度を改め、適切に行動することが大切だと知りました。そして、人権はなぜ大切なのか、差別はなぜだめなのか、という質問がとても難しく感じました。私は今まで、人権は大切で差別はだめだ、というように「なぜ」の部分を考えてことが無かったからです。講演を聞き終わって、私が考えたことは、人権は人々の自尊心を守るために大切で、差別はその自己肯定感を傷つけてしまうからだめなのではないかということでした。相手の自分自身を尊重する気持ちを傷つけるような言動をとると、その人は自分自身の可能性を見出せず、自信が無くなってしまふ、「人生の可能性をうばい、その人の人生をゆがめてしまふ」とはそういうことだと思いました。今、世界にある様々な差別に対して、私は正しい知識を持ち、その知識に基づき、今までの言動をよく思い返し、よくないところは改めていこうと思いました。

まずはお忙しい中、国際高校に来て、お話をしてくださりありがとうございました。ハンセン病の話聞いてまず感じた事は、「未知と悲しみ」です。私は中学生の時に少し歴史の分野でさらっと習っただけで、ハンセン病の講演も今回が初めてで、あまり知識がありませんでした。なのでほとんどすべての事が私にとって未知であり、とても勉強になりました。新たな学びとなったのと同時に、すべての事が本当に起こっていたとは信じたくないような、悲しく冷酷な事実で心が痛みました。特に心が痛くなったのは桜井哲夫さんの話です。ハンセン病にかかると、療養所に強制的に入所させられるというのは、パンフレットや自分の知識で知っていました。しかし、療養所内での結婚には断種したりしないといけないうのは、知らなかったのととても驚きました。今も昔も、愛する人との子供は欲しいと思うのは当然だし、当時の人々もその事を知っていたはずなのに、「子供を産む・育てる」という権利を夫婦から奪うのはありえないし、こちらから見てとても悲しくなりました。そして、手術の失敗により、奥さんが妊娠してしまい、中絶手術をし、哲夫さんも人手不足という理由で手術に参加したというのは、あまりにも悲惨で胸が苦しくなりました。命があった赤ちゃんも息を引き取り、その後ホルマリン漬けにされるというのは残酷だし、本当に最低だなと感じました。子供を授かった桜井さん夫婦にも、命がしっかりとあった赤ちゃんにも罪はないし、悪いのは全部全部、当時の日本政府だし、日本政府にも人様の赤ちゃんの命を奪う権力なんてあってはいけないうのは、本当に恐ろしいなと感じました。話を聞くのは正直、心が痛くなるような辛い話で苦しくなってしまう時もありました。しかしそれ以上に、一日本国民としてそれほど昔ではない、日本にあった差別やハンセン病に関する知識を学ぶことは大切だし、とても良い経験になりました。最後になりますが、私たちにハンセン病に関する事を教えて下さり、貴重な経験をさせて下さり本当にありがとうございました。

私は今まで日本の学校で勉強していました。だからハンセン病という名前を聞く機会はありませんでした。しかし、ハンセン病が昔に流行った感染症であることしか知りませんでした。だから、今日のお話で新しく知ることがたくさんありました。私が特に印象に残っているのは黒髪小学校事件です。ハンセン病の未感染者児で問題はないにもかかわらず、正しい情報を得られる立場である保護者や先生が差別行動をしていたのが本当に残念でした。子供のお手本である大人がそのような行動をとってしまうことで差別がなかなか無くならないのではないかと考えました。また、中山監督が言っていた「科学が感情に負けた」ことがショックでした。各々の固定概念で竜田寮の子供たちに人生被害を与えたのはあまりにも軽率でひどいです。社会生活の初めの方の授業で固定概念について学んだ時にその恐ろしさについて学びましたが、改めて固定概念を外すことの大切さを知りました。また、黒髪小学校事件について興味がわいたので、ネットで調べてみたところ衝撃的な情報を見つけました。それは、ハンセン病の差別とともに国籍差別があったことです。竜田寮からの新入学児童は4人と記録されていたが、本当は7人入学する予定だったそうです。記録されなかった3人は在日朝鮮人であり、入学対象として外されたそうです。人を人ではないように接する非人道的な対応ばかりで、少しでも自分に置き換えたり、同じ人間としてなにか違和感を覚えなかったのかと不思議に思いました。私は社会生活で在日朝鮮人についてお話を聞いていたので、このような二重差別が起こっていたことが日本に住んでいる1人としてなんだか情けなくなってしまいました。これらの差別の中で生きざるを得なかった子どもの中

には自殺してしまった子もいたみたいです。ハンセン病患者が辛いのはもちろんですが、その身の周りの親族がどれだけ生きづらさを感じていたのかを知りました。ハンセン病等の差別を知れば知るほど、どれだけ無知・無関心が罪なものであるか実感します。知らなかっただけでその人の人生をめちゃくちゃにしてしまうなんて、被害を受ける方はもちろんですが、自分が知らない間に加害者になっているかもしれないのが恐ろしいです。そのため、今日この授業が受けられて、自分の知識が増えたことが嬉しいです。また、お話しいただいたことはほんの一部のことだと思うので、実際にハンセン病資料館に行きたいなと思いました。被害を受けた方がいなくなっても、この悲惨な差別をまた引き起こさないために私たちがきちんと理解して繋げていくことが大切だと思いました。今日は素敵な授業をありがとうございました。